

轉換期の教育学

——J・J・ルソー『エミール』分析試論——(一)

鈴木 秀 勇

本稿(一)：IVの分析は、つぎの結論に到達した。

「『エミール』にあつて教育の目的の根幹を形づくるものは、自己保存の力の育成である。なぜなら、この「力」こそ、身分制社会体制の原理である「依存」の反対物として、この体制の崩壊にさいしてなによりもまず求められなければならないものであるからである。

『エミール』が教育の機能¹⁾を語る時、「自己保存の力」の概念が中軸になるのも、右の關係に基づくのであり、また、教育客体の諸能力の發生の秩序との連関で、この力の育成が教育過程の出発点を形づくることになる」。

この・《自己保存力》の育成は、ルソーがその流れの中に立っていた自然法思想の中核である・《自己保存》の概念が、身分制社会体制の崩壊という特殊²⁾歴史的情況を控えて、教育の領域に立ち現われた姿である、と云うことができる。

ルソーが教育の機能をこの見地からとらえたことは、『エミール・第一編』の初めに、「植物は栽培によってつくり、人間は教育によってつくられる」⁽²⁾というアナロジーをおいて、教育が人間にたいしてもつ意義を語るところに、示されている。

「人間が、生まれつき^{すがたかたち}姿形は大きく力は強いとしても、自分の身の丈^{たけ}と力とを使う方法^{りよう}を習得しないうちは、むしろそれは有害なものになるう。なぜなら、身の丈^{たけ}と力とがあるだけに、ほかの者が、この人間を助けよう、という気をおこさなくなるからである。ほうっておかれてこの人間は、自分がなにを必要とするかも知らないうちに、欠乏のために死んでしまうだろう。人は、子どもの状態をあわれむ。人間がまず初めに子どもでなかったとしたら、人類は滅びてしまっていただろう、ということ、人はさとらないのだ」⁽³⁾（傍点は引用者）。

つまり、子どもの時期とは教育の時期であるが、その教育の機能は、『自己保存にとって必要な』対象を知り、また、知られた対象を獲得するために、身体器官と体力とを『使用する方法』を育成するところにあるのであって、それゆえ、この機能を果たす教育の時期としての・子どもの時期をもつでなければ、個体も、したがって類も、自己保存することはできない。ルソーが上に見たような仮定をおいたのは、「^{すがたかたち}姿形の大きさ」「力の強さ」という・いわば実体ではなく、それらを使用する方法こそが、『自己保存力』として不可欠であることを、傍証するためである。教育の機能についての・こうした見方は、ルソーが、自己保存力の内容、つまり自己保存力を構成する諸能力を、念頭におきながら、右にあげた行文の趣旨をふえんしている・つぎの叙述によっても、知られる。

「ひとりの子どもが、生まれながらおとななみの体つきと力とをそなえている、と仮定してみよう。つまり、バル

ラスがジュビターの頭から出てきたように、その子どもが、いわば完全に武装して、母親の胎内から出てきたものと仮定してみよう。この・おとなの子どもは、まったくの能なしであり、木偶でくの坊ぼうであって、体を動かすこともできずほとんど感覚作用もしない彫像であるだろう。彼には、なにも見えず、なにも聞こえず、誰をも見わたることがなく、見なくてはならぬものの方へ目を向けることもできないであろう。彼は、自分の外にある対象をなにつ受け入れないばかりでなく、自分にその対象を受け入れさせる感覚器官の中へなにつ対象を持ち込むことさえしないであろう。目にはなんの色も見えず、耳にはなんの音も聞こえず、彼が物体に触れても、その物体は彼の身体に感じられず、彼は自分に身体がある、ということさえ知らないであろう。彼の手の触感ふかんは、彼の脳髓のうずいの中にあるであろう。彼の感覚内容はすべて、一点に集まるであろう。つまり、彼は、共通感覚きうつうかんかく中枢ちゅうしゆの中にしか存在しないであろう。……

いっぺんにできあがった・このおとなは、足で立つこともできないであろう。平衡を保っていることを学ぶには、おそろしく時間をかけなければならぬであろう。おそらくは、立っतीयたていようとする気さえおこさないであろう。あなたがたは、力があって頑丈けんぢやうな・大きな図体ずたいが、石みたいに動かずにいるか、あるいは、小犬のようにはいずりまわっているのを見るであろう。

彼は、欲求が充たされないので感ずるが、それがどういう欲求かわからないし、欲求を充たす手段を思い浮かべることもないであろう。胃の筋肉と腕・足の筋肉との間には直接の交流はなく、したがって彼は、食物に取り囲とりこもまれていても、食物に近づくために一步踏み出したり、あるいは、食物を手にとるために腕をのばすわけにはいかなないのである。それに、身体は成長してしまっているし、手足はすっかり発達はつたつしていて、したがって、幼児のように落着かな

いこともなければ、絶えず体を動かしていることもないのであるから、彼は、食物を求めるために動き出す前に、餓えて死んでしまうことであろう」(第一編。傍点は原文イタリック)。(4)

右の叙述の意図もまた、さきに見た行文と同じく、ある仮定をおくことによって、人間の・生まれたばかりの「無力」の状態、ルソーの表現をもってすれば「私たちは、習得する能力をもって生まれてくる。しかし、生まれたままでは、なに一つできない、なに一つ知っていない」とされる・その状態、「人間にとって生まれたままの・無知と不動との・最初の状態」(6)、一言でいえば、身体器官と体力との《使用方法》という《自己保存力》が欠如している状態を示すところにある。

ところで、右の「無力」の状態を分析すれば、習得され育成されなければならぬ《自己保存力》の内容、それを構成する諸能力が、明らかに不足である。

まず第一に。ここに仮定されている存在は、感覚器官をそなえているのであるから、その感覚器官にたいする・外界の事物からの作用を刺激としては受ける。にも拘らず、この存在は、「なにも見えず、なにも聞こえず、誰をも見わけることがなく」、「目にはなんの色も見えず、耳にはなんの音も聞こえず、彼が物体に触れても、その物体は彼の身体に感じられない」、つまり「感覚作用もしない彫像」である、とされている。

ルソーが、この存在を、感覚作用もなく、したがって感覚内容もまたぬ、とする理由は、つぎのところにある。

「受け入れること、それが感覚することである」(第四編。『サヴォア叙任司祭の信仰告白』のうち)。「単純な感覚内容の中に、……判断はある。感覚内容の中では判断は、まったく受動的であって、自分は、自分が感覚しているものを、

感覚しているのだ、という、ことを断定するのである」(第三編。傍点は引用者)。すなわち、ここに仮定された存在をも含めて総じて「私たちは、感覺能力をそなえたものとして生まれてくる」(第一編)にしても、しかしかの感覺器官が外界の事物から受ける作用に刺激が、そのようなものとして「受け入れられる」つまり「知覚される」ことがなければ、それはまだ感覺作用ではなく、刺激はまだ感覺内容ではない。ルソーが、あの存在は「自分の外にある対象をなにか一つ受け入れない」とし、また「彼の手の触感、彼の脳髓の中にあるであろう」と述べているのは、この意味である。集まるであろう。つまり、彼は、共通感覺、中枢の中にしか存在しないであろう」と述べているのは、この意味である。このようにして、あの存在は、まず、感覺作用と感覺内容とを欠いている存在である。さきほど見た「私たちは、習得する能力をもって生まれてくる。しかし、生まれたままでは、なに一つできない、なに一つ知っていない」という規定は、感覺能力についてもまた、あてはまる。

第二に。この存在は、「見なくてはならぬもの」「たとえば、自己保存の手段である事物、欲求充足の対象」の方へ目を向けることもできない、「自分にその対象を受け入れさせる感覺器官の中に、なに一つ対象を持ち込むことさえしない」。つまり、この存在は、総じて外界の事物へ感覺器官を向ける能力自体をもたない。

この能力の欠如は、どこからくるのか。

感覺器官は、身体器官にほかならない。ところが、あの存在は、自分に身体器官があることさえ、知らない(「彼は、自分に身体がある、ということさえ知らない」)。このことは、あの存在が、上に見たように、感覺作用をもたないことの結果である。なぜなら、自分に身体がある、という自覚は、感覺作用を媒介として成立するからである。

「私の感覚作用は、それが私に私の存在を感じさせるのであるから、私のなかで起こるのである」⁽¹⁰⁾（第四編。『サヴォア叙任司祭の信仰告白』のうち）。

この理由で自分に身体があることを知らぬ存在は、また当然、身体器官を感覚器官として《使用する方法》も知ってはいない。

そこで、あの存在は、さきに見たように、外界の事物からしかじかの感覚器官に与えられた作用⇨刺激を知覚することによって感覚作用、感覚内容を生じさせることがないばかりでなく、右の作用⇨刺激そのものを生じさせる・身体器官⇨感覚器官の使用方法をも、知ってはいないのである。

第三に。あの存在は、身体器官を感覚器官として使用する方法を欠いているにとどまらず、一般に、行動するため身体器官を使用する方法もたない。その理由はもとより、この存在が、自分に身体があることを知らない、ということにある。ルソーが、この存在を指して、「まったくの能なしであり、木偶^{でく}の坊^{ばう}であって、体を動かすこともできぬ」彫像、あるいは、「足で立つこともできない」、「立ってしようとする気もおこさない」、「力があって頑丈な・大きな図体^{ずたい}が、石みたいに動かずにいるか、あるいは、小犬のようにはいずれまわっている」と規定するのは、右のことを述べているのである。

第四に。この存在は「欲求が充た^みされないのを感じるが、それがどういう欲求かわからない」。この存在は、欲求という内部感覚はもっている。しかし、欲求の自覚は、その欲求を充足させる対象を感覚内容とすることによって、成立する。ところが、欲求充足の対象を感覚することは、外部感覚作用であり、すでに見たとおり、この存在には外

部感覚作用が欠けている。このことは、あの存在が、欲求充足の対象をそれとして知覚することがなく、したがって、欲求がなにかであるかを知覚することがない、ということの意味する。

第五に。あの存在は、「欲求を充たす手段を思い浮かべることもない」。その手段とは、「胃の筋肉と腕・足の筋肉との間に直接の交流はない」とされているように、欲求充足のために身体器官を《使用する方法》を指す。しかし、さきに述べられたように、この存在は、一般に、行動するために身体器官を使用する方法を欠いている。

仮定された・あの存在が、「おとななみの体つきと力とをそなえている」にしても、自己を保存することができないのは、以上の理由による（「したがって、食物に取り囲まれていても、食物に近づくために一歩踏み出したり、あるいは、食物を手にとるために腕をのばすわけにはいかない。……彼は、食物を求めるために動き出す前に、餓えて死んでしまう」）。

こうして、ルソーがあのような存在を仮定することによって語ろうとしたのは、欲求充足の対象を含めて外界の事物が感覚器官に働きかける・その作用＝刺激を生じさせるために、感覚器官である身体器官を使用する方法、こうして生じた作用＝刺激が知覚されて成り立つ感覚作用、および、欲求充足という行動の手段として身体器官を使用する方法——これらが合して自己保存の能力を形づくるものであり、このような要素から成る自己保存力の育成が教育の機能である、という点にある。

右に述べた知覚を通じて感覚作用が成り立つのは、本稿(三)：Vで見られるように、「⁽¹¹⁾感覚的理性」能力のうち、「感覚器官をとおして正しく判断」するために、詳しく言えば、「自分がうけとる・一つ一つの対象について、……感覚

的性質を吟味」し、「事物が私たちにたいしてもっている・感覚的な性質を知る」ために、感覚器官を正しく使用する能力の訓練によるものであるが、ルソーが、こうして成り立つ感覚作用を、自己保存力を形づくるものとしておいた理由は、つぎの規定に明らかな・彼の功利主義の中に求められる。

「私たちは、感覚能力をそなえたものとして生まれてくる。そして、生まれた時から、私たちを取り囲んでいる対象によって、いろいろな仕方で刺激を受ける。私たちは、自分の感覚内容をいわば意識するようになるにすぐに、その感覚内容を生み出す対象を、求めたり、あるいは避けたりすることになる。……」⁽¹²⁾（第一編）。こうして、知覚されたものとしての感覚内容が、対象を獲得ないし回避する功利的《行動》を生み出す場合、その条件は、《充足されるべき欲求》と対象の性質との関係にあるのであるが、その欲求が《自己保存》によって方向を与えられており、対象の性質をとらえるのが感覚作用である、というところに、感覚作用が自己保存力の一つとされる理由がある。

ところで、教育の機能は、上に見た内容の自己保存力を育成するところにある、とする立場が、ルソーの教育思想の基本の一つであることは、彼が重ねて、人間についてのみでなく、およそ感覚し行動し欲求をもつ存在すべてについて、教育が不可欠であることを語っているところに照らしても、確認される。

「動物でさえ、多くのものを『教育によって』獲得する。動物は感覚器官をもっている。感覚器官を用いる方法、習得しなければならない。動物は欲求をもっている。欲求を充足させる方法を習得しなければならない」⁽¹³⁾（第一編。傍点は引用者）。「行動する存在、感覚能力をもつ存在にとっては、一切は教育によって与えられる。もし植物が前進運動をするのであれば、植物は、感覚器官をもたなければならず、知識を獲得しなければならない。さもなければ、

早晚、種は死に絶えてしまふであらう」(14)(第一編)。

すでに見てきたとおり、ルソーは、教育の機能を語るにあたって、人間の・生まれたばかりの状態にある存在を示しながら、その存在がおとななみの身体器官と体力とをもつものと、仮定していた。この仮定をおいたことの意味は、前述したとおりであるが、事実としては教育は、いうまでもなく、これまた自己保存力を形づくるものとしての身体器官、体力、身体の使用能力を、育成するところから出発しなければならないのであって、このところから、『エミール・第一編』と、『第二編』とは、この育成の方法原則と具体的な方法とを示すことになる。

しかし、このようにして、教育の機能が総じて自己保存力の育成にある以上、知的教育もまた、知的能力を、まず自己保存力の一つとして育成するものでなくてはならない。本稿(三)：Vで吟味される・『エミール・第二編』での知的教育——すでにふれた「感覺的理性」能力の訓練——も、その意味をもつものであるが、『第三編』を扱う本稿(四)：I、IVでは、「感覺的理性」能力のうちにさらに進んだ段階の能力、すなわち《單純觀念形成》能力の育成にあたって、学習対象の選択原則の一つが、明確に、対象の知識の「有用性」、すなわち自己保存にたいする有効性に、おかれていることが、見られるであらう。

さらに、同じ『第三編』では、また「労働技術」能力の育成も志されているのであるが、これのもつ意味の一つは、やはり自己保存力としての・右の能力の育成にある、ということが、本稿(四)：Vで示されることになる。

以下、PLIVは、『アレヤド文庫』中の『ジャン・ジャンク・ルソー全集。第四卷。エミール。教育——道德論——植物学。

監修ベルナル・ガニュバン・マルセル・レマン。一九六九年 (Jean-Jacques Rousseau: Oeuvres complètes. IV. Émile. Éducation—Morale—Botanique. Bibliothèque de la Pléiade. Édition publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond. 1969. cccxiii+1958 p.) を『E』とす。『ガニユバン・古典双書』中の『エミール』のナンバリングシャルル・ピエール・リシャル編。一九六一年 (Émile ou de l'éducation. Éd. par François et Pierre Richard. Classiques Garnier. Paris, 1961. L+665 p.) をそれぞれ指し、これに、今野一雄訳『エミール』上・中・下 (岩波文庫) の該当ページを記した。

なお、PLIVに収められている・教育関係の述作は、左記のものである。

- A. 『その子息の教育についてドゥ・マブリー閣下に呈する覚書』。シモン・ド・ヌナン校註 (Mémoire présenté à Monsieur De Mably] sur l'éducation de M[onsieur] son fils. Textes établis et annotés par John S. Spink)° pp. 3—32.
- B. 『サント・マリー殿の教育案』。シモン・ド・ヌナン校註 (Projet pour l'éducation de Monsieur de Sainte-Marie.)° pp. 35—51.

右のA、Bについては、『転換期の教育学——J・J・ルソー『エミール』分析試験——』…第一節』(『一橋論双』第六十巻・第六号所載)への注(1)°とくに右の号の1—7ページ。

- C. 『エミール・第一稿 (フヴァル草稿)』。「断想」を含む決定稿°。シモン・ド・ヌナン校註 (Émile (sic). Première version (Manuscript Favre)° pp. 53—238.

- D. 『刊本・エミール』。刊本・エミールに付された・五枚の挿絵の「説明」複製°。「断想」°。シナン・ウアンズ、シモン・ヌナン校註 (Émile(sic) ou De l'Éducation. Explication des figures. Fragments pour Émile). Textes établis par Charles Wirz, présentés et annotés par Pierre Burgein.)° pp. 239—877.

E. 『エミールとソフィ』。ウィルズ、デュルジャン校訂 (Emile(sic) et Sophie, ou les Solitaires)° pp. 879—924.

上記Dの『刊本・エミール』の校訂は、初版本（これにいうのは、前記『一橋論双』第六十巻・第六号、115—116頁）と、左記稿本とを照合して行なわれた。

一、『第一稿』＝ファウル草稿 (Premier brouillon (Manuscrit Favre; Genève, Société J.-J. Rousseau, Ms. R. 90))』——校訂者は、これをDと略記。

二、『第二稿』(Deuxième brouillon (Paris, Bibliothèque de l'Assemblée nationale, Ms. 1428))』——Dと略記。

三、『校正副』(Copie ayant servi à impression (Genève, Bibliothèque publique et universitaire, Ms. fr. 205,))』——Gと略記。

四、ルソーが新版刊行の目的で書きだした初版本 (Exemplaire de l'édition originale annoté par Rousseau en vue d'une nouvelle impression (ayant appartenu à F. Coindet; Genève, Bibliothèque publique et universitaire, Rés. Cc 12.))——EX・Cと略記。

五、『ボーム』ムントゥに託した『サヴォア叙任司祭の信仰告白』の写本 (Copie de la *Profession de foi* destinée à [Paul] Mouton (Genève, Bibliothèque publique et universitaire, Ms. fr. 224.))——Mと略記。

(1) 『転換期の教育学——J・J・ルソー『エミール』分析試論——(…IV)』(『社会学研究』10所載)。二二六ページ。

(2) PL IV・246。EG・6。今野・上・24。

(3) PL IV・246—247。EG・6—7。今野・上・24。

(4) PL IV・280。EG・40—41。今野・上・69—70。

- (5) PL IV・279。EG・40。今野・上・69。
- (6) PL IV・280—281。EG・41。今野・上・70。
- (7) PL IV・571。EG・325。今野・中・130。
- (8) PL IV・481。EG・237。今野・上・366。
- (9) PL IV・248。EG・8。今野・上・26。
- (10) PL IV・571。EG・325。今野・中・129。
- (11) 『転換期の教育学——J・J・ルソー『エミール』分析試論——(三)：V』(『社会学研究』11所載)。一六九—一八九ページ。
- (12) 前出注(9)と同箇所。
- (13) PL IV・281。EG・41—42。今野・上・71。
- (14) PL IV・281—282。EG・42。今野・上・72。
- (15) 前出注(11)のうち、とくに一七四—一七八ページ。